

第4回 安心・つながりプロジェクトチーム 会議 議事録

(開催要領)

1. 開催日時: 令和7年4月15日(火)17:15~18:15
2. 場 所: 中央合同庁舎8号館8階特別大会議室
3. 出席者(構成員):
 - 石田 光規 早稲田大学文学学術院文化構想学部教授
 - 大西 連 内閣府孤独・孤立対策推進参与
(特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい理事長)
 - 勝部 麗子 社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会 事務局長

(議事次第)

1. 開会
 - ・三原内閣府特命担当大臣挨拶
2. 議事
 - ・安心・つながりプロジェクトチーム中間報告
 - ・有識者ヒアリング
 - ・孤立死者数の推計方法等について(有識者WG報告書)
3. 閉会

(配布資料)

- 資料1 安心・つながりプロジェクトチーム中間報告資料
- 資料2 認定NPO法人育て上げネット提出資料
- 資料3 社会福祉法人愛川舜寿会提出資料
- 資料4 孤立死者数の推計方法等について(有識者 WG 報告書)概要
- 資料5 石田構成員提出資料
- 参考資料1 第1回安心・つながりプロジェクトチーム会合 資料4(抄)
- 参考資料2 孤立死者数の推計方法等について(有識者WG報告書)

○大西構成員 ただいまから「安心・つながりプロジェクトチーム会合」の第4回会合を開催いたします。

本日は、三原孤独・孤立対策担当大臣と友納内閣府大臣政務官の御出席をいただいております。

まずは、三原大臣から御挨拶をいただきたいと思います。

大臣、よろしくお願いします。

○三原孤独・孤立対策担当大臣 孤独・孤立対策を担当しております、三原でございます。

本日開催いたします「安心・つながりプロジェクトチーム」は、本年1月の能登半島や藤沢市の視察をきっかけに、孤独・孤立を予防するための地域の居場所づくり、つながりづくり、また、多世代交流の重要性を実感いたしまして、それをきっかけに発足させたものでございます。

現在、政府では、孤独感の高い若年層への孤独・孤立対策に一丸となって取り組んでいるところでありますが、同時に、より長期的な視点に立って、単身世帯の増加に備えて、つながり、居場所づくりを通じた現役世代も含めた孤独・孤立の予防が重要であると考えています。

本プロジェクトチーム構成員の皆様には、検討の中核を担っていただき、2月から3度の大変熱気ある議論をいただいております、改めて心から敬意を表したいと思います。

そして、第4回の会合となる本日は、地域でつながり・居場所づくりに取り組まれている認定NPO法人育て上げネットさん、社会福祉法人愛川舜寿会さんからお話を伺うということでございます。

先進的な取組を教えていただいて、これを議論することをとても楽しみにしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

また、今日は、これまでの議論を踏まえた中間報告をいただくことになっております。

本年夏までの議論の取りまとめに向けて、今後一層、議論を深めてまいりたいと思っておりますので、本日も幅広く、そして、活発な御議論をいただけますように、どうぞよろしくお願いいたします。

○大西構成員 三原大臣、ありがとうございます。

続いて、友納政務官からも一言お願いいたします。

○友納政務官 内閣府大臣政務官の友納でございます。三原大臣とともに孤独・孤立対策を担当しております。

私は、本日含め4回全て参加させていただきまして、本当に密度が濃く、時間も1時間では足りず、少し時間を延ばしたりして、お話を聞かせていただきました。

単身世帯が増加する状況と、現在行われている厚生労働省の取組を伺って、支援することが遅れば遅れるほど、多くの支援が必要になり、より専門的な支援が必要になるため、早い段階で関わっていくことがとても重要であると考えております。このプロジェクトチームで議論するのは、厚生労働省が政策、制度として対応する前の段階の部分なのではないかと、私の中での位置づけをしております。

NPOの皆さまから、居場所をつくることの重要性和、居場所に来られない方に対して、どうやって手を差し伸べるかということの重要性を伺いました。また、今回のポイントの一つである受援力という部分で、支援を受けることがなかなかできない方に対して、どうやって支援の手を差し伸べていくかというところについて、上からの支援というよりは、一緒に何かをやっていく形になるのかなと思っていますが、そういったところを今日も皆さんのお話を聞きながら考えさせていただければと思っています。

今日もとても密度の濃い会になるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

○大西構成員 ありがとうございました。

プレスの方は、ここで退室をお願いいたします。

(報道関係者退室)

○大西構成員 それでは、配付資料の確認と委員の出欠状況について、事務局より御説明をお願いいたします。

○事務局(江浪室長) 配付資料は資料1から資料5まで、参考資料1及び参考資料2となります。不足がございましたら、事務局までお知らせいただければと思っています。

次に、構成員の出欠状況でございますが、本日は大西参与、石田構成員、勝部構成員の全員に御出席いただいております。以上でございます。

○大西構成員 ありがとうございました。それでは、議事に入ってまいりたいと思いますが、本日も盛りだくさんでございますので、コンパクトに進めていければと思っています。

初めに、私から本プロジェクトチームの中間報告をさせていただければと思います。

資料1を見ていただければと思いますが、それなりに分量があるものですので、全ては読み上げずに、簡単に御紹介させていただければと思います。

まず、これまで3回「安心・つながりプロジェクトチーム」が開催されました。

第1回の会合では、現状の論点整理等をさせていただいて、第2回の会合では、先ほど友納さんよりお話がありましたが、国立社会保障・人口問題研究所の藤井先生より、単身世帯の推移や社会的な影響について御説明いただき、また、厚生労働省の成年後見制度利用促進室長の火宮さんから、現在、厚労省で進めている地域共生社会の在り方検討会議における議論等を御共有いただきました。

前回、第3回の会合では、3名の有識者ヒアリングということで、認定NPO法人全国こども食堂支援センターむすびえの湯浅理事長から、居場所づくりの考え方、在り方等について御説明いただき、宮崎の社会福祉法人三股町社会福祉協議会の松崎さんから「タグ」という言葉を活用されていましたが、当事者の課題とか必要な支援の切り口にするのではなくて、みんなでやりたいこととか、気になることを切り口に、居場所をつくるというようなアプローチの取組を御発表いただきました。

それから、NPO法人ソソリスの萩原さんより、自治会と若者が連携した取組事例、群馬の前橋でやられている事例ですが、そういった様々な取組を伺いました。

これまで様々な御意見が出てきたかと思います。「単身高齢者等の孤独・孤立状態の予防に

向けた論点」ということで、いくつか改めて整理させていただければと思いますが、長期的視野に立って、現役世代(若者・中高年層)も含め、単身高齢者等の孤独・孤立を予防していく施策を適切に講じていく観点から、どのような支援が必要と考えられるか。

具体的には、当事者と支援者の双方の視点に立って、例えば以下について議論を深めることとしてはどうかというところで、これまでの議論を踏まえて、改めて整理しました。

1つ目は、多世代交流の視点も含めた多様な居場所づくりの促進・担い手の確保に向けた取組。支援する・される側という関係を超えた包摂的なつながりづくりの観点も重要であろうと。

2点目は、先ほど友納さんのお話にもありましたが、受援力を高めるための個々人の意識醸成に向けた取組及び支援につなげることが難しい方(声を上げづらい方等)に支援を届けるための取組が重要だろうと。

3点目は、行政に期待される役割。3点目は、これまでの議論の中で出てきたところを改めて整理し、こちらに加えさせていただいたものとなります。

「議論の棲み分け」についてですが、単身世帯の増加に付随して出てくる問題に関し、孤立死する前の段階として、亡くなった後も含めた生活上の諸課題にどう対応するかについて、システムの部分は厚労省や民間の事業者、保険の分野などで取組が進んでいます。一方で、このプロジェクトチームで議論する部分は、人と人とのつながりをどう育み、また、それを誰が担っていくのか、という部分なのではないかというのが1つ目。

2つ目は、課題が深刻になればなるほど専門家の関わりが必要となるところ、このプロジェクトチームでは、その前の段階の地域で支え合うとか、それに対する支援や支援を受ける側の受援力の向上といったことを、居場所づくりと併せて議論していくことが重要ではないか、ということ。

また、「多世代交流の視点も含めた多様な居場所づくりの促進・担い手の確保の観点」について、特に「居場所づくり」の観点からも様々な議論がありました。

人によって、どのようなつながりを求めるのかは異なること、複数の場があることが大事であること、ヒアリングでは「タグ」といった言葉が使われていましたが、本人が好きなことに応じた居場所を作り、地域に多様な場(タッチポイント)があることが大事であるという意見がありました。

このほか、居場所には、たくさんの居場所を提供する「どこも」という視点と、どんな方にも少なくとも一つの居場所がある「どこか」という視点の両方が必要であることなど、様々なキーワードが出てきました。全部紹介すると時間がなくなってしまうのですが、本当に様々な居場所の在り方があり得るだろうということと、逆に「ザ・居場所」という形だと行きづらいかもしれないとか、様々な意見が出てきました。

「担い手確保の観点」で言えば、こちらでも幾つか論点が出ましたが、自治会など地域住民と一緒に取り組むことはどうやっていけるのか。その中で、若い方たちがどう地域に関わるきっかけをつくるのかということも一つの論点になったかと思います。

また、対話も含めて、地域の人たちとどういう場づくりをしていくのか。自主的な活動を活発

にするには、どのようにしていくのか。そういったところが担い手確保の観点からも重要ではないかという論点が出たかと思います。

それから「つながりづくりの観点」では、これも様々な意見がありましたが、つながりはとても大事である一方で、人間関係が傷つく原因になる、ストレスになることもあります。つながりがしがらみになることへの忌避感が高いという意見や「SNS以上しがらみ未満」のつながりをどうつくっていいのかという意見がありました。

また、一人でいることに慣れると、つながることがおっくうになってしまう。これは、石田先生がおっしゃったと思いますが「つながりフレイル」もとても重要な視点だということ。

このほか、つながらないことも権利であるという意見も、この間の議論で出てきたところかと思っています。

そのため、様々な形でつながりをどうつくっていいのか、そして、選択できるようなつながりが大事ということと、逆に、福祉的な制度の対象となるほど課題は抱えていない方に対して、どのようなつながりを届けていくのかも含めて、様々な論点が見えてきたかと思います。

2点目の「受援力を高めるための個々人の意識醸成の観点及び支援につなげることが難しい方に支援を届ける観点」も幾つかありましたが、例えば居場所は、当事者が自ら行きたくなるような場であることが重要であるという意見や、支援をするのではなくて、役割をつくることも重要ではないか、という意見がありました。

あと、繰り返しですが、抱える課題のみに着目するのではなくて、本人が好きなことなど、様々なタグ、様々な居場所、様々な地域の場所を増やすことが大事だねということも議論の中で出てきたことかと思っています。

3点目の「行政に期待される役割の観点」でも、様々な意見がでてきました。居場所づくり・つながりづくりなどの取組をどう支えていくのかということ、公助の役割や共助の役割をどう強くするのかなど、様々な重要な意見がありました。

全部は御紹介できないのですが、以上、資料1のような形で、「安心・つながりプロジェクトチーム」の中間報告をさせていただきました。

それでは「有識者ヒアリング」に移ってまいりたいと思います。

本日は、認定NPO法人育て上げネットの工藤理事長と阿部さんのお二人に来ていただきました。

それから、社会福祉法人愛川舜寿会の馬場理事長にお越しいただきました。

工藤さん、阿部さんには、特に若年層に向けた居場所づくりの観点から御説明いただきます。馬場さんからは、多世代交流、障害の有無を問わない、多様な居場所づくりの観点から御説明いただければと思っております。

まず、認定NPO法人育て上げネットの工藤さんから御説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○工藤理事長 ありがとうございます。説明させていただきます。私たちは、もともと若者や子どもの支援団体ですので、団体内に支援機能を持っている。そこが居場所をつくっていること

が特徴かなと思っております。

そのため、私たちとしては、なるべく早く、困る前でもいいし、困っていない若者も含めて、地域に接続できる場所を持っていれば、困ったときにも、そのまま支援することができると考えております。

自宅にすることができないと、家では暴力があるような子どもたちや若者の声を我々がキャッチすることもあります。そのような問題意識から、夜の時間で開けられないかということから、2022年5月から、毎週土曜日午後6時から午後9時まで、原則閉じることなく開けています。週1回、時間を限定して、年末年始でも閉めないことを基準に立ち上げたのが「夜のユースセンター」です。

ここでは、夜御飯も用意していますし、ゲームや音楽など、できることも充実していますし、帰りは、必要な食材を持って帰ってもらっています。

特に私たちが重要視したのが地域のネットワークです。例えば、夕食は、近隣の個店に発注するようにしています。そうすると、そこから情報が広がり、また新しい若者、子どもたちとつながることもできます。

また、基本的に誰でも来ていいのですが、民間として独自資金でやっていますので、無限に受け入れられるわけではありません。物理的な空間の制約もあります。そのため、学校の先生とか、少年院の法務教官の先生方にカードをお渡しして、困っている方がいたら、このカードを渡してください、後ろに誰の紹介か、書いてくださいということで、顔の見える形の紹介制を取っています。

現在、1日40～50人来ますので、年間52回で約1,600名です。問題を抱えていないと言う若者もありますが、あくまでもタイプの的に言いますと、次のページにあるような方が来ています。

特徴としては、法務省と連携して、少年院等への出入院、もしくは現に少年院に収容されている少年たちを支援していますので、夜のユースセンターの利用者の中には、いわゆる非行少年と言われるタイプの子たちも混じっているのが、特徴かと思います。

「運営のポイント」としまして、いくつか挙げさせていただきましたが、運営の一番のポイントは、基本的に目的を持たない、成果指標を立てないということです。何人来てほしいとか、相談は何人ということを目標にしていません。

大人の支援臭をなくすためにも、夜のユースセンターでは、メニューとしての支援をしません。職員にも、これは支援をする場所ではないと伝えています。支援が必要であれば、支援の部門にちゃんとつなぐことを大事にしています。

年間120名ほど、行政の方の視察があります。行政の方が頭を悩ませているのが、成果指標を持っていませんという点と、やることは決めていますという点です。

2つ目に、子どもたち、若者たちがやってみたいことを一緒にやるということを前提としています。バンド、ライブをやりたいという話があったので、昨年12月、ライブハウスを貸し切って、100名ぐらいのお客さんを入れてバンドをやりました。また、めちゃくちゃまいお肉を食べてみたいという話があったのでめちゃくちゃよいお肉を出そうということで、地域の方や寄付

者の方々とチームとなって、BBQしました。海外に行ってみたいということを実現したいということで、実現できないこともあるのですが、地域の方々と共に、利用者の希望を極力実現できるような取組をすることを大事にしております。

3つ目として「地域ネットワーク」です。先ほど申し上げたとおり、教員や公共機関の支援者、地域の方からつながれてきますので、私たちが広報・広告、集客をやっていない中でも、ちゃんと利用者がある形になっています。

もう一つは、利用する若者が、似たように困っている友達や兄弟を連れてくることもあります。半年、1年たってから連れてきますので、大体安心、ここは大丈夫だということが分かってから、仲間を連れてくる。先ほど申し上げたのですが、あくまでも出会いと接続の場なので、私たちから相談しませんかとか、困っていませんかとは言いません。

ただ、彼らがしゃべりながら、ちょっと困っている話が出れば、別の日の別の時間帯に相談できるので、そこで会うようにしています。とにかく「夜のユースセンター」については、支援をしない場所であることを大事にしています。

他地域展開に関しましては、休眠預金を活用して、9都道府県・10団体に資金をお預けして、夜の居場所を展開しました。

そこで合同の調査もやっておりまして、実際、夜の時間帯の居場所に来るようになった若者たちに関して言うと、約半分が公共サービスを知らない、使ったことがないと回答していました。

また、利用する理由は、無料であることと、夜だからということ。

孤独・孤立感尺度を使った調査結果としては、居場所利用者には、孤立感を抱えた若者が多く含まれており、孤立感を聞く質問では、平均の2～3倍の方が「あてはまる」と書かれていました。

ここで、民間活用という意味では、10か所で居場所を運営して、1年間の資金をお預けして、夜の居場所をやってみたのですが、今でも5か所ほどが、調達した資金の中で継続することができています。

今回の論点で言うと「多世代交流・担い手確保」に関しては、土曜日の夜だけに開けているので、土曜の夜なら時間がある方々、日中働いて夜は都合がつけられる方、副業・兼業をされたい方、一人で御飯を食べたくない方が、ボランティアという形での関わり方をしやすい時間帯となっています。

また、設置目的に「支援」がないので、いわゆる支援者でなければいけないという縛りはありません。もちろん、支援スタッフはいますが、支援と同等にも、一緒にいてくれる方々の存在が非常に大事になってきます。

また、若者たちの希望に応えるために頑張る人たちなので、それ自体が子どもたちとの関係性がフラットになったり、地域の方々とのつながりが生まれることになります。

受援力は非常に難しいのですが、もともと援助希求をされている方を前提としていませんので、多分困っている方も、または困っていない方も受け入れていると思いますが、3年ぐらやってっていると、半年してから「実は」という話は出てきますので、継続と、開けると決めた日は絶対

にやっていくことが大事だと思います。台風が来た場合には、一応閉じる話はしますが、来てしまう人がいるので、必ずスタッフが待機するようにしています。そこに必ずいるのだということは重要なこと。

課題があるとすれば、経営、継続、運営の部分、行政の平時の大事な役割としては信頼だと思っています。行政の方が一緒にやっているということが、私たちの場所に若者たちをつなごうとしてくださるひとたちにとっても安全・安心につながります。

私たちの居場所が安全であることを担保するのは、行政の関わりです。行政の関わりは、予算面で関わっていただく場合もあれば、私たちはこの事業を民間でやっているの、公共事業であるふさと納税の返礼品のない寄附を立川市役所につくっていただいて、寄付者の方々はふさと納税として立川市に寄付していただき、市が私たちにその寄付を交付していただきます。その意味でも、夜のユースセンターには、行政が関わっています。

以上です。

ありがとうございました。

○大西構成員 ありがとうございました。

続いて、社会福祉法人愛川舜寿会の馬場さんに御説明をお願いしたいと思います。

馬場さん、お願いします。

○馬場理事長 私たちは、社会福祉法人愛川舜寿会という神奈川県のアヱ川町、人口3万9000人で、高齢化率31%ぐらいの都市で、駅のない場所なのですが、相模原市の隣、厚木市の上、海老名の上にある町から来ております。

「365日を、ケアにする。」というタイトルにしたのですが、今のお話もそのとおりなのですが、365日が必要になってくる。

では、これをどう担保していくのかというときに、私たちの発想としては、既存の全国の特養は、9,000程度、小規模多機能、デイサービスは8,000程度、グループホームが1万5000程度ありまして、合わせると3万拠点ぐらいあります。先ほどお話があったように、既存の行政とのつながりがあって、公的な、言わばオフィシャルなお墨つきがついているような場所を担っている社会福祉法人が、主たる事業の余白に、居場所としての機能を有したものをつくっていくことがいいのではないかと、感じるところです。

春日台センターは、事業構成としては、認知症グループホーム。小規模多機能型居宅介護と言って、訪問介護、デイサービス、ショートステイ(お泊り)ができるという3拍子そろった介護保険事業です。それから障害者就労継続支援A・B型。そして放課後等デイサービスは、障害のある子ども、子どもアフタースクール子どもです。

最後にコインランドリーと洗濯代行です。これは、3番に書きました障害者就労支援事業で、コインランドリーと、コロケスタンドを実施しています。

あと、寺子屋は学習支援で、アヱ川町は高齢化率とともに、外国につながる子どもたちが非常に多く、神奈川県内33市町村トップで、外国人比率が9.2%という状態です。

大体多くは南米とか東南アジアで、英語はほとんどしゃべれない、日本語がしゃべれない状態

で日本に来て、やがて言語の問題で不登校になっていく。小学校の全校生徒400人のうち、外国籍の子が120人もいるような学校もあったりします。

そんな中で、私は2代目で、うちの父の時代に、特養という高齢者のいわゆる「ザ・介護施設」をやっている、それを私が引き継いで10年ちょっとになるのですが、その中で、いろいろな地域の人たちとの対話を重ねていったのがこの表(スライド3枚目)なのですが、愛川町の状況をリサーチをしていくと、外国人の問題とか、それに付随して不登校の問題なども散見されていることが分かりました。

当時の僕らのように、高齢者介護だけをやってると、子どもの話題はほとんど出ません。認知症の話題とか、孤独・孤立の話は出ますが、この情報を持ってきた地域の方たちとワークショップ、3～4年間で延べ1,200人以上の方たちと公民館を使って、いろいろな課題抽出をやった時期がありました。

その中で、「福祉施設を町の生活動線上に置く」と書きましたが、昔だと、目的と手段で言うと、手段としての場所性みたいなものはあまり考えなかったと。

だから、いわゆる収容型だった特養の現状とか介護施設の現状、障害者施設の現状があって、それが街中に位置する場合、主たる事業の空間的やや広めに構えておけば、そこにいろいろな人たちがアクセスできるのではないかという発想です。

「センターセンターの主な取組」としましたが、高齢者グループホームと障害児通所支援事業を同じ建屋で隣接する形で行っています。担当課が別になります。愛川町でも、障害福祉課と高齢介護課を併せて、制度上成立させていくことを現場の中でチャレンジしております。

そうすると、障害の子どもが帰ったときに「おかえり」という言葉がある。おばあちゃんとなじんでいく障害の子がいて、その障害の子がランドセルを背負って帰ってくるので、その同級生のいわゆる健常の子たちが一緒にそこに遊びに来るような、モデル的な動きが生まれてくる。

あと、洗濯代行についてですが、共働き世帯に対して、家事負担の軽減をするための一つの装置として、コインランドリーが最近、全国に広がっているという背景があります。

その中で、洗濯の代行を担っている。お忙しい、特に女性が参画してきている中で、女性の家事負担の軽減を目的とし、かつ、合わせ技で、そこに障害者の雇用を生んでいく形で、今、洗濯文化研究所という形で運営しております。

あとは寺子屋の機能と、一番下が、要するに、公共空間だった場所、もともと広場みたいなものがあつた場所に長屋の商店街があつて、そこが荒廃してきており、誰も入ってこない。全部〇〇モールなどの、ワンストップの大型ショッピングモールに吸い込まれているので、小さな、小刻みな機能ができなくなっている。住宅政策につながるような話だと思っていますが、そういう中に引き込んでいくことが大事なのではないかと私たちは考えています。

この映像は、前が広場になっていて、我々がいわゆる看取り介護をやって、御遺体が広場に出ていき、地域の方たちも一緒になってお見送りをするところなのですが、向かいの建物は自治会館です。

自治会館にいろいろな方たちが集まって、老人ホームという、閉鎖的なものだと考えている

ところを、これは入居者の認知症のおばあちゃんと一緒に手を合わせてお見送りをしているところ。あと、職員たちも一緒にお見送りをしている。

ここに、学校帰りの子どもたちが交ざってきたり、その映像は、時間帯が午前中なのですが、放課後の時間に子どもたちが来て、一緒に何だ、何だと思ったら、それが御遺体だったということが後で分かってくる。

これが、主たる介護の担い手、全国に3万ある介護事業の余白、プラスアルファの受益者を見据えて高齢者だけに限定しないような心構えが必要なのではないかと思っています。

たまたま私たちが建築学会賞を取らせていただいたり、グッドデザインの金賞をいただいたりした関係で、副次的なものなのですが、いろいろな分野の方が集まって、いろいろな意見交換をするようなチャンスが、3年間ぐらいありました。

この写真は、右からお母さんと子どもと、一番左が、うちのデイサービスに來ている認知症のおばあちゃんなのですが、右の彼女は、シングルマザーになられて、それと同時に子どもが生まれた。

そんなタイミングでうちが立ち上がって、最初は子育て支援センターに通っていたのだけれども、うちに通うようになってきたのです。何故かと聞いたら、子育て支援センターは、「子育てを支援される人しかいないではないですか」と。

支援されに行くということで、先ほどのお話に共感しているところですが、一番左のおばあちゃんが「ママがしっかりと育てているから、いい子に育てているわ」と言ってくると。そうすると、彼女は涙しながらその喜びを僕に伝えてくれたということがありました。

つまり、一番右は、対象としては子育て支援課の受益者、真ん中は0歳の保育課の受益者、一番左が高齢介護課の受益者ということなので、それが1枚の畳の上で、2畳あれば、こういう瞬間を生み出すことができる。やや飛躍して聞こえるかもしれませんが、横串をどのようにつくっていくのかというのが、私たちの中でも必要な視点だなと考えています。

論点をまとめると、開かれた日常空間がどのようにつくられるか。これは、夜のユースセンターの取組を聞いていても本当にそうだと、思いました。「開かれている」という定義も、もう一回改めて洗い出していく必要があるだろうと思います。論点2としては、福祉というフォーマルな事業と、セミフォーマルな地域活動があったときに、ここの中間領域をどのようにグラデーションしていくかが非常に重要で、そこに関して言えば、我々社会福祉法人のように、どこにでもあるような法人が音頭を取っていく、あるいは具体的に言うと、そこに加算をつけていくとか、報酬をつけていく。本来はそういうことがなくても、自発的に動いてほしいところではありますが、一つのきっかけとして、例えば地域共生型のような呼び名で一旦置いてみると、そこに加算をつけていくなどの取組は、一つの可能性としてあるのだと思います。

3番は、町ぐるみの予防的ケアとか日常的ケアを生む場づくりの支援メニュー。これが2番目の話と重複しますが、どうやったら日常的にアクセシビリティを高めることができ、ややこしい受付がなく、何か身元を明かさなければいけないわけでもなく、自然と動いていくような、緩やかな支援体制をつくれるのだろうかということ。そこで、我々の方法論としては、建築と空間を

考えた。軒下が何を生むかという、日本建築の縁側、影を生みます。影を生むと、暑い日は影に人が集まるという習性があります。例えば雨が降ったら、雨宿りをします。

そういう空間的な作用で人と人がつながっていくことが我々日本人の歴史の中にあったではないかということを建築家と議論してきた。

春日台センターセンターは、もともとスーパーの跡地でして、昭和の時代はみんなが集まっていたので、1970年代、1980年代にできたこういう土地はどこにでもあると思いますので、ここで365日かけて孤独・孤立対策をしっかりと包容していく、踏み込んでいくような施策を、我々事業者から、まずは制度ができる前に、チャレンジングにという形でやってきたので、今日、お声がかかって非常に光栄でした。どうもありがとうございました。以上になります。

○大西構成員 ありがとうございます。

それぞれの団体さんともに、1時間とか、2時間とか発表してもらっていいぐらい、ボリュームのある内容を凝縮していただき、発表いただきました。育て上げネットさんは、夜のユースセンターもそうですが、それ以外も本当に様々な事業をやられていて、全国的にもどれもかなり取組が注目されている団体ですし、馬場さんのところもすごく面白い活動を実施されていて、コロッケも、もともとスーパーで出していたお惣菜の味をそのまま再現しています。

育て上げネットの阿部さん、もし何かお話ししたいことがあれば。

○阿部氏 私は、毎週末、ユースセンターの現場に出て、本当にいろいろなたくさんの若者たちが日々来ていて、最初に始めたときは、毎週10人ぐらい来ればいいのか、むしろどれぐらい来るのかなというところで始めましたが、今や40人、50人を超えるような若者たちが来ています。

実際、現場には中学校年代のお子さんから、上の方ですと、就労支援をやっているというのもあるので、私たちの支援を得て、今は働いて、社会人とかをやっている40代、50代の方、OBが来て、いわゆる働きながらも、特に家庭や自分の中に問題はなくても、毎週末やっていて、ここに行けば、懐かしい顔のスタッフが一生懸命にやっているところで、戻ってきてくれる居場所になっていて、特に勉強が分からないとか、みんなで純粋に友達をつくりたいとか、わいわい騒ぎたいなというグルーピングもあれば、本当に部屋の片隅で一人でYouTubeを見ながら、誰ともコミュニケーションを取らない若者もいます。

支援になってしまうと、人に慣れていったり、集団の中に慣れていこうと、どうしても支援者が背中を押してしまいますが、あえてそういうことをせずに、一人でいてもいいのだよ、いつ来てもいいし、食事を食べて、すぐにそのまま帰るでもいいしというところで、本当に無目的な環境をつくりながら、そこであれが欲しい、これがしたいという声も出てきますので、できる限り彼らから拾った言葉を現実的にしてみる。

そういった経験の格差という問題も一番だと思いますので、そういったところを可能にしていけるよう、すごくたくさんの方々の応援とかもいただきつつ、活動していければと思っています。

ちなみに、男女比で言うと、今、女性の方が意外と多くなっていて、大体こういう場所は男性の方が多いのだと思うのですが、今は高校生年代が多いので、今は女の子たちが7割。7

対3ぐらいで、本当に女の子ばかり。

トラブルとしても、すぐにSNSでつながったり、連絡先の交換だったり、一応、ルールとしては、つながらないようにしていますが、そういったトラブルも日常的にあります。

だからといって、出入り禁止にしてみようとか、来られなくなってしまうということをせずに、スタッフで協力しながら居場所を安心するまでつくれるように、目を配っている感じになります。
○大西構成員 ありがとうございます。阿部さんは、親しみやすいお兄ちゃんという感じで、ふらっと入れる場づくりに取り組んでいる。

愛川舜寿会様は、まさに施設の塀を壊して、誰でも行き来できるようにとか、非常に面白い取組なのですが、時間も限られていますので、構成員の皆様から御意見を伺えればと思っております。

今の御説明を踏まえて、長期的視野に立った孤独・孤立の予防の観点としてのつながり・居場所づくりや、受援力の向上といった観点から、時間は限られているのですが、石田構成員、勝部構成員、それぞれお二人から御意見を伺えたらと思っておりますが、いかがでしょうか。

○石田構成員 本当に興味深いお話をありがとうございました。どちらも、ほかの施策ではなかなか届かないようなところに手を伸ばして届けているのかなという感じがいたしました。

もし時間がありましたら教えていただきたいのですが、いずれも継続をどのようにしていくのか、どうやって広げていくのかというところがポイントになってくるのかなという感じがいたしました。

夜のユースセンターさんの目的を持たない、成果を立てないというのは、逆に言えば、多分、ファンドの申請とかがとても難しいところがあるのかなという気がしましたので、そういった中で、こういうものを継続させていくためにはどういうものが必要なのか、あるいはこういった試みをどんどん広げていって、それこそ手軽に、地域でふらっと行ける場所があると非常にいいと思いますので、広めていくに当たっては、どういったことが課題なのか、教えていただければと思います。

あと、愛川舜寿会さんからは、社会福祉法人は非常にたくさんあるので、いろいろな社会福祉法人がそういうことをやっていただければ、孤独・孤立対策としては非常に手厚いことができるのではないかと思います。

私の家のそばでも、カフェを社会福祉法人さんが造っていて、コーヒーを1杯100円を出して、いろいろな地域の人が集うということもなさっているので、こちらについても、いかにこれを仕組みにして広げていくのかということがこれから大事なのかなと思いますので、もしそういったところでお考えがありましたら、教えていただけますでしょうか。

○大西構成員 では、まず、育て上げネットさんから。

○工藤理事長 資金に関しては、毎月、マンスリーサポーターの方と、ふるさと納税の寄付からほぼ100%、私たちの寄附に、市役所を通じて来るものを毎年年度末にお願いしています。

ただ、継続に関しては、それだけで継続できるかは難しいです。約1,600名、300～400名の若者になりますが、物価高騰、人件費の上昇などもあり、また若者たちの数が増えればその

分コストもあがっていくからです。

僕らのところも、働いている者もいますが、これから働く子もいるわけです。例えばこれから働く人材と捉えた場合に、彼ら、彼女らに働いてほしいという企業もいるはずです。もしかすると、今日の夜のユースセンターは、株式会社どここのスポンサーで行っているといったようなこともできるかもしれません。若者たちは、夜に居場所がないかもしれませんが、他のセクターから見れば、若者たちの能力やスキルを欲しているということもあるでしょう。

これは夜のユースセンターを開所する際に検討したのですが、居場所づくりをやろうとされる場合、いきなり時間軸を広げ過ぎている。

私たちは、毎週1回、3時間しかやっていません。これで毎回大体40～50人来ると、今、コストが500万円ぐらいかかっています。

これを週5、週6、週7とやろうとすると、人の確保、人件費、光熱費がとんでもなくかかってしまうので、できれば週2回あれば、食料を持って帰っていくことを含めても、1週間分の食べるものには困らないのですが、週1でも、地道にやり続けるほうがいい。ただ、行政の方と話をすると、すぐに週5実施できないかとなるわけです。週1から始めるところから考えないと。週1ならみんなでできるのですが、週5、週6、週7で実施するとなると担い手がないのです。

だから、ミニマムモデルをたくさんの方のところにという考え方の方が、居場所政策上も広げやすいと思っています。

○大西構成員 確かに、毎週ですが、週1だからできる。

だから、立川でやっていて、八王子でやってもいいし、調布でやってもいいみたいなことですね。

○工藤理事長 そうです。

○大西構成員 馬場さん、いかがですか。

○馬場理事長 ありがとうございます。社会福祉法で、社会福祉法人の使命という言い方になってしまうのですが、公益性をどのように担保しているのかということで考えたときに、私たちはこういう方法になりました。

例えばNPO法人さんみたいに、小さくて、小回りが利いて、熱意があって、ミッション型の組織というよりも、もう少し安定と言ったら失礼なのかもしれませんが、社会福祉法人は、もう少し公的資金が潤沢なイメージがあると思うのです。

特養という本丸の課題、我が国の高齢化の担い手というところもあるので、そういう人たちが細かな地域課題とか、細かな社会課題みたいなものに、もう少しフォーカスしていく必要があるのではないかと個人的には思っていて、それを今おっしゃったように、事業として立ち上げようかというところは、この先には方法と手段としてはあるかもしれませんが、主たる事業の余白を使ってやるという形であれば、横展開が少しスムーズになるのではないのでしょうか。

事業を立ち上げていくと言うと、新規事業の設計が必要になってくるので、また厚生労働省も含めて議論が必要になってくると思うのですが、そうではなくて、地域の人たちがアクセスできることを担保しておく。

空間なり、設計なり、職員教育を始めていくのがスモールスタートというか、アクションになってくるような気がするので、我々は今、この3年間で年間1万人ぐらい全国から視察を受け入れていて、そういう話は、かなりの数、本当に小さな力かもしれませんが、やっている。

そうすると、空間のことを再考し始める。要するに、外の人がアクセスできるという発想は収容型施設にはないので、その部分を私たちとして実践として進めるのと、あとは、大きなハードルを掲げずに、まずは地域の人が年間でどれぐらい訪れるのかというカウントみたいなことをひとつ制度として義務づけていくことは、起点、出発点にはなるのではないかと考えております。お答えになっているかは分かりませんが。

カフェでコーヒーが100円というのは、結構採算が厳しい。そういうものを無理してやると、サステナビリティが下がると僕は考えています。

なので、自分でペットボトルのお茶なのかは分からないのですが、そういう形のほうが現実的なのかなという気も少ししています。

○石田構成員 ありがとうございます。

○大西構成員 では、勝部さん、お願いします。

○勝部構成員 夜のユースセンターのお話について大変興味深く聞かせていただきました。ここは安全という居場所があることは、とてもいいなと改めて実感しました。

週1というのはすごく大事だと考えており、私たちも週1で取組を実施しています。週1ぐらいで命を助けることはできるのかという意見はあるのですが、週1回でも、継続的に取組を行えば、相談できる関係性が構築されていきます。つながり続けていると、LINEでいろいろな相談が来る。自分が今、困っているときにぱっと相談できる関係性が構築できる、つながりによって、週1の関わりはすごく大事だなと思いました。

それから、すごい社会福祉法人があるものだと思ったのですが、場の力と、多様な人がいると、役割が生まれるのだということですね。

赤ちゃんがいると、赤ちゃんが歩いているだけでみんなを癒やしていったり、高齢の人は、赤ちゃんを見ると、すごくお世話したくなったり、見守ったり、若い人を褒めたりというところで、役割が生まれる。

例えばコミュニティセンターを造ったら、部屋を全部細かく刻んで、誰も出会えない、一緒の場所にいるけれども、全く課が別で、誰も知らないとか、出会えないということが起きたり、複合施設でも、特養と児童養護施設が一緒ですと言っても、シャッターが閉まっていて、中を絶対に行き来できないようにしているみたいなことがよくあります。もともとそういうものがなく、いろいろな人たちが多様なところで役割があったから、元気になる。

今回、万博が始まっているのですが、「いのち輝く」とは何かとすごく思っていて、人はつながりで元気になって、役割で輝いていくみたいなことを思うと、場の空間は素晴らしいなと思いました。

自然に見えている、孤独が気になったらそばに行ける。こんな建て方は許されるのですか。

○馬場理事長 そうですね。そこにはしっかりと、なぜこうしたいのかという目的をはっきりする

必要があって、おしゃれだからとか、そういう軽薄なものではない。社会福祉の成り立ちはお寺から始まったり、戦争孤児をつなげていくとか、そういった歴史がある。そういうことでいうと、自動ドアがあって、そこに受付があったら駄目なのです。皆が何となくふらっと、縁側に腰をかけていたら、そこで会話が始まるような、アフーダンスというのですが、空間によって人が動きをつくられていくということを意識しています。

○勝部構成員 とても素晴らしいと思います。

ここまでの施設を造るのは、なかなか難しいかもしれませんが、例えば普通の一般の民家で、私たちも、固定のデイサービスをやる場所ではなくて、そこに子どもも来るとか、いろいろな多機能のものもやっていくと、人の流れができていくとも思うので、かつて小学校やお寺、神社とかがコミュニティーづくりの拠点だったとするならば、昭和から進化したものがほとんどなくて、その次の令和の時代につながっていくための新しい拠点みたいなものをうまく考えていける可能性を非常に感じました。ありがとうございます。

○大西構成員 皆さん、貴重な御意見をありがとうございます。私も聞きたいことがたくさんあるのですが、次の進行に行きたいと思います。

続きまして、石田構成員から、孤独死・孤立死ワーキンググループの取りまとめについて、報告をお願いしたいと思います。

○石田構成員 先日、新聞などで御覧になっていただけた方もいらっしゃると思うのですが、孤立死のワーキンググループを2年間にわたって実施してまいりまして、ようやく推計値を出すところまで至りました。そちらについて、簡単に御説明申し上げます。

資料は幾つかあるのですが、「資料5」と書いてあるパワーポイントを御覧ください。

孤立死の推計値について、まず、ページをめくっていただきまして、推計値をどのように出したのかといいますと、このたび、警察庁さんから御協力をいただきまして「警察取扱死体のうち、自宅において死亡した一人暮らしの者」についてのデータを利用いたしました。

こちらは、自宅において死亡された一人暮らしの方なので、たまに新聞のメディアなどを見ますと、複数の方々に亡くなっている方もいらっしゃるわけなのですが、そういった方は入っていません。

ただ、データとしては、複数の方で亡くなるという事例は非常に少ないので、そこまで少なくはなっていないのかなというところでございます。

このデータの中で、2番目のポツに入りますが、生前の社会的孤立が強く推認できる死後8日以上の方々を目安に、孤立死という形で考えております。

また、死後4日についても、例えば遺体の腐敗が始まることも出てまいりますので、あと、死後4日となると、それなりに人と会っていないとも考えられますので、こちらも目安として提示いたしました。

その結果、どれぐらいの件数が出てきたのかといいますと、8日以上で2万1,856件、4日以上で3万1,843件になっております。

65歳以上が、8日以上で1万5,630件、4日以上で2万3,324件となっておりまして、この数字だけを見ると、増えているのか、減っているのかということを気になさる方もいらっしゃると思うので、参考として、ニッセイ基礎研究所さんの2010年のデータを用いて、全国の推計値を出しております。

こちらは、東京都23区のデータを基に推計しておりますので、恐らく、23区は孤立死が最も多いと思われるので、過大に見積もられている可能性が高い。

その2010年はどれぐらいだと考えられていたのかというと、こちら65歳以上で、8,605件が8日以上。ですから、今回の推計の65歳以上、8日以上の1万5,630件と比べますと、この10年でかなり増えていることが分かります。

4日以上については、1万5,603件となっておりますので、2万3,324件と比べてもかなり多い。

ちなみに、ニッセイ基礎研究所と同じ推計の仕方では、2024年の孤立死の件数のデータを見ると、警察庁さんのデータよりも若干多くなっておりますので、基本的にはかなり増えている傾向にあると認識していただければと思います。

では、次のスライドをお願いします。こちらは、報告書に出ている年齢階級別・男女別の孤立死の数となっております、一番上の行が「総数」となっていますが、これは小さくて見づらいので、次のページをお願いいたします。

男女比はどれぐらいなのかといいますと、一番上の「総数」は「8日以上」になると、79.4%が男性となっておりますので、男性が非常に多い。「4日以上」でも76.8%なので、8割弱が男性ということが分かります。

また次のスライドに行ってくださいまして、年齢層別に見ると、こういった方々にリスクが多いのかというところを見ていきます。こちらの表は、分母の部分が、1年間で亡くなった数です。分子の部分が、その中で孤立死をした方となっておりますので、1年間の死亡数の中で、孤立死をした方がどれぐらいいるのかということを表しております。

赤枠で囲ったところを見ていただきますと分かりますように、男性の50～64歳までが特に孤立死率、孤立死として亡くなった方が非常に増えている。

特に4日以上というところを見ますと、55～59歳では10%を超えておりますので、つまり、死亡件数の中の10件に1件は孤立死と推認できる形なので、結構大きな数となっております。

強く推認できる8日以上になりますと、大体8%よりも少し低いぐらいとなっておりますので、ここを見ていきますと、50代～60歳前半あたりの男性が孤立死のリスクが高いという結果になっているところです。簡単ではありますが、以上となります。

○大西構成員 石田さん、ありがとうございました。50代、60代前半というのも、数字で見るとなかなか厳しいと思っています。また、地味に20代も高めで、子ども・若者の自殺の問題もあるのかなと。

○石田構成員 はい。この中には自殺も入っていますからね。

○大西構成員 そういう意味では、今回のPTでも、かなり射程に入るテーマかなとも思いまし

た。

それぞれの2団体の方からは、まさに毎週必ずやるとか、目的は持たない、成果を求めないという非常に大きなキーワードでしたり、開かれた日常空間をどうつくっていくのかというところとか、これまでの様々な議論とも重なる部分と新たにいただいた示唆がそれぞれあったかと思います。

締めに入っていきたいと思いますが、友納政務官、三原大臣、それぞれ一言ずついただきたいと思っています。

先に、友納政務官からお二人に一言いただければと思います。

○友納政務官 今日もお話しいただいて、ありがとうございます。

触れ合いと接続の場は、とても重要だと思っています。見つけて、つなげて、支えるという3段階で、多分、現在はつなげる機能がとても薄くて、つなげられない状況がありましたので、つなげるというところに、皆さん大きな発揮してくださっているのは大変ありがたいです。地域と福祉の間の中間領域のお話もありました。こちら、中間になかなか手が伸びていないというお話だと思いますが、要は、地域で予防するところと、福祉で個別支援につながる間の中間領域をつくるのが重要で、その部分の取組が足りていなかったものと感じています。

示唆に富むお話をいただきまして、誠にありがとうございました。

○大西構成員 では、最後の締めくくりに、三原大臣から一言お願いいたします。

○三原大臣 今日は本当に貴重なお話をいただきまして、ありがとうございます。

ヒアリングにおきましては、私からすると、大変衝撃的な話だなと感じました。

あえて支援臭をなくすのが、今の若者たちに一番必要なかなと感じましたし、また、高齢者とこどもと、全てと一緒に集まっている光景を拝見していると、また、お寺からということで、なるほどな、昔からちゃんとヒントはあったのだなと。そこを私たちは行政として、もう一度見直すことも大切なのかなとも感じました。

また、今日、大西参与からは、PTの中間取りまとめをいただきまして、石田先生からも孤立死ということで、いろいろなお話も伺ったところであります。

今日、こうした論点を最終的にいろいろな形で、結果を多角的に分析していくことが非常に重要なのだと思いますが、いずれにいたしましても、このつながりプロジェクトというか、単身高齢者だけに限らず、孤独・孤立を感じている方々は年齢、立場を問わずということで、どのようにお支えるのか、つながりを持っていくことが大切なのかということは非常に難しいなと改めて感じたところでございます。

今日いただいた貴重な御意見は、しっかりと議論のたたき台として、最終的な取りまとめはどのようにしていくかと思いながら伺っていたところですが、週1で継続するというお話がありました。

私たちも同じだと思うのです。継続が何よりも重要でありますので、頑張り過ぎない、肩肘張らない、そうした支援と言わないような形も、ある種、受援力ということも考えると、支援される側の人にもそういったことが結構重要なのだと。

私たちは、どうやって手を差し伸べるかばかり考えていましたが、そうではない、そうされたくない方のことも特に考えていかなければいけないのだというようなことも今回のプロジェクトチームで感じたところでありますので、またいろいろな御意見を聞かせていただければと思いますし、また取りまとめにつきまして、お付き合いいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○大西構成員 三原大臣、ありがとうございました。

次回の会合については、事務局から改めて御連絡させていただきます。本日の会議は以上で終了いたします。

どうもありがとうございました。